人が尊重され、
生きがいを感じられるあたたかい町

人権啓発コーナー

問　生涯学習課　☎0965-52-5860

毎月11日は人権を確かめあう日です

人権に関する動画を放映します。
皆さんの参加をお待ちしています。

■ テーマ
車イスから見える新しい世界
■ 日　時　1月9日(金) 13時30分
■ 場　所　氷川町文化センター ロビー

男女共同参画社会に向けて

平成11年6月に国の「男女共同参画社会基本法」が制定されました。男女共同参画社会とは、性別に関係なく一人ひとりが尊重され、自分らしく活躍しながら生きられる社会のことです。

皆さんの身の周りではいかがでしょうか。「男性は仕事、女性は家庭」という価値観にしばられてはいませんか？「男だから、女だから」とやりたいことを我慢したり、言いたいことが言えなかったことはありませんか？自分の日常生活の中で、男女の役割をもう一度見つめなおしてみましょう。

また、普段当たり前のように使っている言葉や意識していないことでも、男女共同参画の視点から見てみると疑問に感じることもたくさんあります。性別に対しての「思い込み」や「決め付け」に気づいたら、お互いに声をかけ合っていくことも大切ではないでしょうか。

みんなが個性や能力を活かして、自分らしく活躍できる社会をつくっていきましょう。

八火図書館だより

☎0965-62-3489

新年あけましておめでとうございます。本年もどうぞ、よろしくお願いいたします。
今年も皆さまの読書生活がより豊かになるようにお手伝いしていきたいと思います。
たくさんのご利用をお待ちしております。

新着図書紹介

■ 一般書

鎌倉茶藝館 ／ 伊吹 有喜
白魔の檻 ／ 山口 未桜
さらば！店長がバカすぎて ／ 早見 和真
80 歳、私らしいシンプルライフ ／ 徳田 民子

■ 児童書

えかきになりたいねずみくん ／ なかえ よしを
のらねこノラ ／ すげ いずみ
きいろいバス ／ ローレン・ロング
ハートのレオナとエレナ ／ MISIA

おすすめ図書

秀長と秀吉 ／ 歴史の謎を探る会

天下人・秀吉と、兄の影となってすべてを支えた弟・秀長。兄弟はいかにして戦国乱世を生き抜き、天下統一を実現したのか？逸話と戦記に彩られた英雄としてではない、真実の豊臣兄弟に迫る1冊。

『2026 若い人に贈る読書のすすめ』

1月からの特設コーナーは成人式・卒業式など新しい一歩を踏み出す若い人たちに読んでもらいたい、おすすめの本を紹介しています。ぜひ、ご利用ください。

お知らせ

寄贈本を頂きました。

鎌倉日記Ⅲ 平成その日その日 ／ 三木 卓

その時代の匂いや雰囲気が味わえる、鎌倉から見つめた平成日本。

歌集 茅花吹く風 ／ 中村 美喜子

坊守を60年務めた著者。
繊細な感覚を持って、春夏秋冬の自然の移ろいを歌に詠む、米寿を迎えた人生の悲喜交々。

こ家センの
子育てLabo

こども家庭センターのスタッフが子育てについての情報を発信していきます！

今月のトピック

体はもちろん、心にもメリットがある親子遊び

こどもは日中たくさん体を動かすことで、よく食べてよく眠れるようになります。家族で過ごす時間が増えるこの時期に、親子でスキンシップを取りながら体を動かしてみませんか？今月は室内でもできる親子遊びをいくつか紹介します。

出典：子どもの遊びポータルサイト　「ミックスじゅーちゅ」

注意！ 遊ぶ時は、ケガをしないように部屋を片付けて、周りに物を置かないようにするなど、安全に配慮しながら楽しんでくださいね。

氷川町こども家庭センター
☎0965-62-3456

町民文芸

投稿先　〒869-4814　氷川町島地642番地　企画財政課宛（毎月5日必着）

短歌

暮れ早し庭に傾く我影の
ながァーく伸びる長き夜
西野津　古崎　栄子

せんだんの滝に下だれば水しぶき
音とどろきて紅葉重なる
西野津　古崎　スエノ

幼き日若き日の唄流れくる
毎食卓の愛に感謝
西上宮　廣松　真実子

道ゆけば焼きたてパンの匂ふ街
嬉しくなりて口笛を吹く
北野津　井田　道寛

俳句

行く秋や小春日和もすぎにけり
西野津　古崎　栄子

初空や重機並びて静もれり
西上宮　山下　環

老人会笑って踊る菊日和
西野津　古崎　スエノ

春秋やけいこの帰り歩はかるし
西上宮　廣松　真実子

汽車去るも時雨傘ある無人駅
北野津　井田　道寛

『金閣寺燃ゆる』
三島由紀夫「金閣寺」から　その14

法道寺　本田　花風

「山々がその眺望を隔てているけれど、見ようと思えばそこへ行って見ることもできる一つの物だった。美は、かくて指にも触れ、目にもはっきり映る一つの物であった。」自分の中で、美は金閣という実態をもっていたのである。

第二章

父の死。京都へ出て、金閣寺の従弟になる。従弟の修業を味わうために預けられている鶴川少年と臨済学院中学で同級生となる。「帝都空襲不可避」の新聞記事、金閣が灰になることは確実と感じる。吃りを気にしない鶴川。終戦までの一年間が、金閣と最も親しみ、安否を気づかい、その美に溺れた時期である。京都は空襲に見舞われなかった。

私は鶴川と五月のよく晴れた休みの日に南禅寺へいった。臨済宗南禅寺派の大本山。

辺りの景色に見惚れながら「ええもんやな」「うん」と二人は豊かな時間を過ごしていた。石川五右衛門が楼上の欄干に足をかけて、満月の花を賛美したのはこの山門である。

我々の眼下には、道を隔てて天授庵があった。障子をあけ放った広い座敷に通じたところに緋毛氈があざやかに敷かれていた。